

渡辺一枝

いちえさんの

春・夏・秋・冬

十二月の暮らしごよみ

渡辺一枝(わたなべ いちえ)

1945年ハルビン生まれ。作家、エッセイスト。自らの生活スタイルをもち楽しむ生きかたと独特の色あいのある優しさにみちた文章で現在多くの女性の共感を集めている。昨年春に18年間の保母生活にピリオド。特技は何でも食べられること、どこでも眠れること、忙しくても遊べること。自分流野草料理、人形づくり、染物、野・山・川で遊ぶこと、雲・空・風などの気象観察と、趣味は多彩。

著書には『自転車いっぱい花かごにして』『気が向いたら風になって』『ひなまつり』『時計のない保育園』『空ゆく雲を追いかけて』(いずれも情報センター出版局)などがある。

いちえさんの春・夏・秋・冬 十二月の暮らしごよみ

定価 1200円

昭和63年5月15日 第1刷発行



著者——渡辺一枝

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

企画編集——株式会社講談社出版研究所

代表 山本康雄

〒112 東京都文京区小日向4-6-19 共立会館

電話 東京(03)943-2613

印刷所——株式会社東京印書館

製本所——株式会社堅省堂

© Ichie Watanabe 1988

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは講談社出版研究所宛にお願いいたします。

〈担当 萩原裕子〉

ISBN4-06-203643-6 (0) (研)

いちえさんの春・夏・秋・冬

十二カ月の暮らしとよみ

まえがき

もう開花寸前に桜の蕾がふくらんでいたのに思いもかけぬ名残りの雪。そして明けた朝はキララにまぶしい東の風、わすれな草の青の空には雲の峰とその峰を横切って走る飛行機雲の白い筋二本。

春はいつだって、こうやってめまぐるしく装いを変えながら現われるので、私はいつでも惑わされるのです。でも実のところ、そういう戸惑いを楽しんでもいるのです。そうして思います。私自身が季節になってしまえばいいのだ、と。でもそれは叶わな^はいことなので、せめて私の暮らしを折り折りの季節で満たそうと思うのです。私の毎日を、春にははる色に、夏にはなつ色に、と彩りながら生きたいのです。

十代の終りの頃、私はひたすら三十歳に憧れていました。そして三十になったとき、今度は早く四十歳になりたい、と思ったものでした。自分でもいささか変わっているとは思いましたが、友人たちにも笑われました。けれども四十になったとき（それは三年前のことでしたが）そう思ったわけがわかりました。おかしい話かもしれませんが「これから私の人生が始まる」と思えたのです。

それまでは糸を紡いだり、紡いだ糸を染めたり、織機の具合を調節したり、あるいは小さな布を試し織りしたり……そんな日々だったように思えるのです。四十になったとき、私は私の布を織り出せる、と思ったのです。

たて糸の一本一本を、丹念に杼ですくいながら私は、私という布を織りたいと思いました。そう思ってみれば一日一日を自分の心持ちに添うように、ていねいに暮らしてゆきたいのです。季節の流れ

てゆくなかで、そのときどきを、私らしく過ごしたいのです。

私のはる、なつ、あき、ふゆ。日めくりをめくるように過ごす一年を、この本では綴ってみました。伝統や慣習にとらわれたくない一方で、私流の年中行事にこだわります。流行には背をむけて、ひたすらに自分の感覚に頼ります。書き出してみればずいぶん幼い日のことのなかに、この先もずっと大切に持ち続けていきたいこともあって、私という人間の性分が、たいそう「こだわり性」だという気がしています。

思い返してみれば子どもの時分から「この子は強情つ張りだ」「わがままだ」と言われて育ってきた私が見えるようです。今はもう、いつそ開き直って「ええ、ええ、そうですとも。私は私流に暮らしたいのですから」と言えるようになりました。そうして人にもすすめます。人それぞれの「私流」を。店には季節を失くした花や野菜、果物が並んでいるけれど、私はかたくなに、冬には茄子を買いません。きゅうりもトマトも買いません。野菜を食べながら、季節をも食べてしまいたいのです。春には春の野菜たち、夏には夏の野菜たちを食べたいのですから。きのうと同じように今日がきて、また明日を迎える日々だけれど、その毎日のなかでたとえば私流のハレの日の食事、桜の御飯、柿の葉のお寿司、菊尽くしの献立、そんなことを楽しみます。

私らしいやり方で、季節を身にまとうようなおしゃれもしたいし、野山に遊びもしたいのです。やっぱり叶うことなら私は、季節そのものになりたいなあと思っています。私の日めくりは、移ろう季節から寄せられた贈りもののかもしれません。

光まぶしい三月に

渡辺一枝

一月



年始めの膳

188

初詣

195

お年玉

198

七草

202

鏡開き

206

二月

節分・立春

210

アカギレ

213

受験生

217

ねこやなぎ

220

雪

224



三月



雛祭り

228

草摘み・草もち

232

春の風

235

春の山

238

花束

241



四月

エイプリル・フール
10

桜
13

新学期
16

朧月夜
19

四十雀
22

五月

鯉のぼり
28

茶
32

柿若葉
35

山菜採り
39

列島日本
44



六月

梅雨
48

梅漬け
52

白い花
56

アジサイ
61

蛭
64



七夕 70
 ゆかた 74
 夏休み 77
 蚊 80
 夕立 85

七月



花火 88
 帽子 94
 葛 97
 忘れない日 100
 お盆 102

八月



晩夏 108
 台風 111
 虫 115
 お彼岸 118
 薄着 122

九月





十月

金木犀 126

空 130

自然乾燥花 133

秋の味覚 136

菊 140

十一月

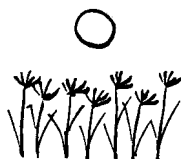
着物 146

名残りの月 150

風 152

冬を迎える準備 155

冬野菜 159



十二月

新しい足袋 166

冬至 169

買物 172

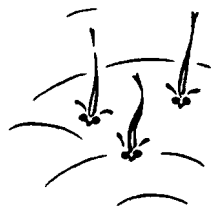
新年の準備 176

おせち料理 181

大晦日 185

装幀・本文レイアウト
イラストレーション
野口 多田
聡 進

四月



エイプリル・フール



子どもの頃はどんなにかその日を待っていたでしょう。前の晩からああでもない、こうでもないと考えて、とびきりひねったことを考え出したはずなのです。そして真顔で話しているつもりなのに、顔のどこかが笑ってしまっているのでしょうか、大人たちは真剣に聞いて「へえー」と驚くのですが、本気にされては大変と「四月バカ!」と言うと「コラッ」と笑ってこぶしで打つまねです。あれは今思うと、嘘は先刻御承知での「コラッ」だったように思います。エイプリル・フール。その起源はフランスともインドとも言われ、理由も諸説あつてはつきりはないようですが、十八世紀頃から一般に普及したようです。

子どもの頃にだって、日々そんなに清廉潔白で嘘がないわけではなかったのに、おつかいのおつりを、こっそりポケットに入れてしまうこともあったのに、それでもこの日は誰憚らずに嘘がつけるのですから、楽しいことでした。思えばそうでない日の嘘は、やつぱりうしろめたくて胸の痛む嘘でした。

でも四月という月もずいぶん思わせぶりな月だと思えます。嘘をついてもいいよ! と宣言して始まりながら、暖かいと思ってセーターを脱げば、また冬に逆もどりかしらと思う風まじりの雨が降ったり、陽気に誘われてその気になれば、しっぺ返しをくうのです。なんだかエ

イブリン・フルは四月が自分自身のために設けた日のような気がします。

そういえばこんなことわざがあります。「菜の花盛りには狐にだまされる」。うらら、うららの陽気にうかれた人なら、狐もだましやすいかもしれません。また「春の日と親戚の金持ちはくれそうでくれない」これを聞いたときに、最初私は日暮れとお金をくれるとをかけたしやれで、思わせぶりなことを揶揄することわざかと思ったのです。でもこれは、春分過ぎから日が伸びて労働が激しくなるので日没が待たれての言葉だったと知って、畑仕事の経験がないことを情なく思いました。物の感じ方までが軽くなっていくようです。

でも四月の嘘なら、なんだか罪が軽い気がします。梅雨空に身も心もじつとりとする頃にジュライ・フルなどといって七月馬鹿の日があつたら、だまされたうらみが後まで残る気がします。四月のこの軽さは、空の色にもよるのかしら、とも思います。なんだか白々と、晴れて青い空のはずの日でさえも、なんだか白々としているのです。

春の空は細かいちりが多いために空は白く見えるのです。パステルカラーが春に似合うのは、空の色そのものがパステルカラーだからなのでしょう。そしてこの春の空の色に、柔らかない柳の葉のよく映ること。柳こそ四月の樹です。物憂い春には、あのなよつとした枝の流れもふさわしい。

四月はなんだか奇妙な月です。つかみどころのないような、嘘で始まるこの月は。その一方では万物が清らかではつらつとする気持の良い季節、清浄で明るい季節「清明」というのだから。そしてまた、存外に雨の多い月でもあります。

春の雨は憂うつです。木の芽、草の芽もほころんで生命が躍動するというのに、またこの雨

は田畑を潤す恵みの水というのに、春の気怠さは雨が降ればなおのこと、気は晴れません。さらになお、今はもう「春雨じゃ濡れて行こう」の気取りも危険な時代になってしまいました。ニュークリア・レイン、核の雨です。

一九五四年、ビキニの黒い雨のことを私は今でもはっきり憶えています。小学校の三年生の時のことです。おそろしいことだと子ども心に刻みました。そしてまたチェルノブイリの雨です。春の雨は、ことさらに不気味に降るのです。エイプリル・フールだよ、と笑って済まされない現実のなかで。

桜



牧野さんの植物図鑑には二十四種もの桜が載っていますが、日本中どこにでも分布しているバラ科の木です。古くはコノハナ（木の花）と呼ばれて花木を代表するものでした。『日本書紀』にも桜をよんだ歌があるそうです。日本古来の花で日本の国花ともされているのですが、私にはなんだか美しすぎて怖いのです。花のときにはもう葉のある山桜や、花の小さな彼岸桜、豆桜は好きなのです。田舎娘のような八重桜も平気です。花ばかりこれぞと咲く染井吉野が怖いのです。

なのにとても気になる花です。いつ咲くかしら、もう咲いたかしら、と。そのくせ枝々の花がいつせいに開いたときは、そしてはらはらほろほろとその花がこぼれば、目を固く閉じてしまいたくなるのです。桜という花は、なんだか人の気を奪っていくような、そんな心地がします。桜と私の間には薄い見えない幕があつて、こちら側にいるならいいのです。あの美しさに心奪われて、その幕を越えたらなんだか私は、もう戻れない気がするのです。

子どもの頃、母に連れられて行った花見の宴で、あの樹の下にもこの樹の下にも、お酒に興じた人たちがいました。その頃は私も、無邪気に花の下を走りまわっていました。私の身近にはお酒を飲む人はいませんでしたから、そんな見知らぬ大人たちを、なんだか物珍しいものを

見る心地で眺めていました。もしかするとそれは、子どもの中にあるとても冷酷な眼だったかもしれません。

もうそんなふうには母と出歩かなくなった頃、家の近くには桜の並木がありました。そのどれでも、私の腕には抱えきれない幹でした。桜の小枝を折っては、髪に挿して鏡をのぞいたりしてみました。子どものくせに大人の目をした私がいきました。

あるとき歌を聴きました。戦争で父を亡くしている私は、なんだかいやな気持になりました。桜が歌われたその曲も、歌う人もいやでした。桜がかawaiiそうだ、と思いました。そしてまた、こぼれる花びらがその涙のように思えました。桜の、そして人々の。かつての日のように無邪気に花の下を通ることができなくなりました。

私が大人になったとき、大好きだった叔母が亡くなりました。いつになく遅い桜がやっと咲き、春爛漫のときでした。そして数年後、今度は叔父が後を追いました。桜吹雪のときでした。叔母も叔父も二人とも、花の幕の向こう側に行ってしまった。

私には桜が怖いのです。けれどもとても気になる花、その花の散る頃、桜供養をするので、桜の花の間ずっと、心落ち着かなく過ごしていても、風に花びらが舞ってしまうのは淋しくて、そしてまた平安な心に戻れることもうれしくて、そんな複雑な思いを納めるために、桜供養をします。

もう散りはじめている枝を飾り、桜の御飯を炊きます。塩漬けの桜の花をさつと水で洗って、塩を落とします。もち米を少し混ぜた御飯を炊いて、塩を洗って刻んだ桜を合わせます。香りと塩味が移ってゆかしい桜御飯です。そして彩りの映える菜の花のお浸し。京麩のお吸いもの